

日本語教師は日本語ボランティア教室にどう関わるか ー参加者の期待とコースデザインー

野々口 ちとせ

要 旨

日本語ボランティア教室に対して日本人住民と外国人住民の相互学習の理念が提案されているが、教室に参加する「日本語ボランティア」と「学習者」は共に学校教育的な日本語教授を期待しているという調査結果が多く報告されている。そこで、日本語教師が日本語ボランティア教室で参加者間の相互学習を目指してどのようにコースデザインをすれば参加者の期待がどう変容するかを、アクション・リサーチの手法で調査した。教師は相互学習の理念を参加者に伝え実現するために、コースデザインにおいて以下3点の改善を図った。(1) ボランティア、学習者という呼称を使わずに、日本人も外国人も「参加者」と呼び、活動内容や参加費等の負担を等しくする、(2) 活動設計と教材作成は教師が担当する、(3) 活動は、自己表現活動、自分たちの生活や町を捉え直す活動、参加者による共同作業で構成する。

この結果、コース終了後の参加者の期待にはある程度教師の目指す教育理念が反映された。一方で初日以降の参加を見送った人もあり、彼らは教師のねらいに共感できなかった、あるいは参加に困難があったと推測され、導入のあり方や多言語対応に課題を残した。

【キーワード】日本語教師、日本語ボランティア教室、期待、コースデザイン、相互学習

1. 問題の所在：日本語ボランティア教室をめぐる理念と現実

日本語ボランティア教室は、「社会教育」として(山田 2000)日本人住民と外国人住民による対等な関係性の構築(田中 1996)を目指し、「多文化共生社会を生きる人を創る社会的実践の編成」(西口 1999)の場とすることが提案されている。また、岡崎(2001)は「共生言語としての日本語」の教育を提示し、母語話者の日本語を規範とする言語教育からの脱却を求めている。これらの提案には、参加者の関係性、教育の場、学習観、言語観の4つの点において、体系化かつ系列化された知識の伝授といった学校教育的な学習活動(佐伯 1995)とは異なる理念が示されている。

しかし、日本語ボランティアには「教科書に基づいた」効率のいい教え方への志向(内海・富谷 1998)が見られ、庄司(2004)の調査ではボランティアと学習者の双方が「日本語教授法的技能の向上」を希望しているという結果が出ている。つまり、日本語ボランティア教室の参加者は、母語話者=教え手、非母語話者=学び手、という固定した関係と、

学校教育で植えつけられた知識の一方的な伝授という教育観・学習観の下で活動していると考えられる。日本語ボランティア教室は参加者の関係性、教育の場、学習観、言語観のすべてにおいて、教育理念と参加者の希望が一致していないのである。

2. 本研究の目的と課題

本研究では、日本語ボランティア教室を外国人住民と日本人住民の相互学習の場にするために上記の溝を克服する手だてを探ることを目的とする。そして、参加者間の相互学習を目指した日本語ボランティア教室で、日本語教師(以下、教師)がどのようにコースをデザインしたとき、参加者はどんな期待を持つかを研究課題とし、2期にわたる教室データから以下の3点を中心に記述し、考察する。

- 1) 教師は教室の目標と参加者の期待をどう捉えたか
- 2) 教師はどのようなコースデザインを行ったか
- 3) 参加者はコース終了後にどんな期待を持ったか

3. 研究の方法

本研究では筆者が教師として関わる教室の改善を目指したアクション・リサーチの手法をとった。筆者が教師を務める「にほんご教室」(仮称)の2001年春期と同年秋期の実践を対象とし、データとして、フィールドノート、電子メール(教師間/教師-ボランティア間/ボランティア間)、「学習記録」、配布物(ワークシート/補助教材/成果物)、コース終了後のアンケートを収集し、解釈的アプローチ(ランパート1990)による分析を行う。

4. 春期

4.1. 「にほんご教室」のメンバー

「にほんご教室」はいわゆる行政主導の教室で、メンバーは、社会教育主事と「講師」と呼ばれる教師、それに「学習者」「ボランティア」と呼ばれる人たちである。学習者とボランティアは、町の広報やチラシなどを通して募集される。

社会教育主事 教室の事務を担当し、予算の確保、参加者募集と申込受付、参加者の名簿作り、参加費の徴収を行う。

講師 センター主催の講座・教室の「講師」として教育委員会から委託を受けた4名がパート雇用され、2名ずつ火曜と金曜に分かれて担当する。「ボランティアを指導できる人」として、日本語学校など教育施設での教師経験を有すること(社会教育主事談)が必要とされている。

学習者 学習者の多くはセンターの近辺に住んでいるか、または勤めているいわゆる定住型の外国人である。日本語学習歴が全くない人から10年以上滞在していて日常会話には不自由のない人まで、国籍も韓国・中国・フィリピン・ロシア・イタリア・ブラジル等多様である。

ボランティア 「外国人の日本語学習を助けながら交流するボランティア」は町の広報で募集される。会社員や学生、主婦、看護師といった人たちの中には、日本語教員養成講座を受けた人や、海外在住・留学経験のある人が数名いる。この期のボランティアは全員日本人で、男性ボランティアは14名中2名、女性が圧倒的に多い。コースのはじめ4回はボランティアだけを対象とした準備活動に当てられ、「学習者」のニーズ分析、教材・教具の使い方と作成、異文化接触について考える活動を行う。

4.2. 教室の目標と活動デザイン(岡崎・野々口

2002)

教室の目標 教師は「みんなでわいわいやりましょうって感じ」の「活動」を通して、「ことば(の学習)ではなく、日本人と外国人が一緒に暮らす中で、何かできる」ことを実践し、両者が対等な関係を築くことを目指した。

参加者の期待 教師はコース前ミーティングで「ここできっちり勉強したい」という学習者もいると話しており、学校教育的な学習活動が期待されていると考えている。

活動のデザイン 教師は、学習者の期待を反映して前半1時間は読む/書く/話すの技能別学習活動、後半1時間を教師の目指す交流活動として設定し、ボランティアによる活動の立案と実施を支援することとした。

表1 春期の後半の交流活動(ボランティア主導)

第1回	自己紹介・ジェスチャーゲーム
第2回	友人紹介・インタビュー
第3回	踊り
第4回	自国の紹介1
第5回	自国の紹介2/レシピ作り
第6回	料理
第7回	質問大会
第8回	外国語講座
第9回	しりとり・言葉遊び
第10回	物作り/ゲーム
第11回	伝言ゲーム
第12回	物作り(包む・折る)
第13回	ビデオ鑑賞/町のおもしろマップ
第14回	レシピ作り
第15回	料理
第16回	異文化ゲーム *教師主導

4.3. 参加者のコース終了後アンケート

「日本語学習のためにいらしていた方には申し訳ありませんでしたが、私は日本人と外国人の価値観の共通点や違いに関心があり、今回、大いに学習させてもらったという記述があり、参加者自身が参加者間の期待のずれを感じとっていることがうかがえる。また、「講義形式にて進めた方が良かった」「自分達で考える事も必要だとは思いますが、短期間、ボランティアということで皆時間がない、という理由から、プロフェッショナルな方が道筋をつけてくれた

方がよい」という記述には、知識の伝授という教育観・学習観の中で、教師の教授技能を求める参加者のとまどいが表れている。

5. 秋期

秋期は活動時間が午前中で保母がつくため、春期より主婦が多い。男性は13名中3名で、ボランティア¹応募者の中には在日韓国人1名がいた。教師は春期の実践を振り返り、参加者の相互学習をより明確に目指す必要があると考え、メンバーのあり方や活動設計に以下のような改善を図った。

5.1. 秋期「にほんご教室」のメンバー

講師 日本人教師による教室のコーディネートに外国人教師が1名加わった。このことは外国人が支援される側ではなく支援する側にも立つことを明確に示すことになり、コースデザインにも外国人の視点を取り入れられていく。

ともに学ぶ「参加者」

春期の参加者は「ボランティア」と「学習者」で呼称も処遇も異なっていた(表2)が、秋期の教室ではともに「参加者」と呼んで処遇を等しくし、ボランティア対象の準備活動を廃止した(表3)。

表2 春期のボランティアと学習者の処遇

	ボランティア	学習者
準備活動	あり	なし
面接	なし	あり
テキスト	貸し出し	配付される
参加費	なし	2,000円
継続参加	なし	あり

表3 秋期の日本人参加者と外国人参加者の処遇

	日本人参加者	外国人参加者
準備活動	なし	なし
面接	なし	なし
テキスト	なし	なし
参加費	1,000円	1,000円
継続参加	なし	あり

5.2. 教室の目標と活動デザイン

教室の目標 教師間の電子メールに残されたミーティング記録には、「日本人も外国人も一緒に動いて、みんな楽しく友だちになる ←なぜならば、新しくこの町にやってきた『私』は『この町のルール(やってはいけないこと)を知りたいから』『困ったときに相談にのってくれる人がほしいから』

『グチがこぼせる仲間がほしいから』とあり、直接的に日本語学習を目指すのではなく、参加者の自己開示と他者受容を目標としていることが読み取れる。

活動のデザイン 教師らは、春期は「結果的に日本人にホスト役を求めた形になってしまった」(教師間の電子メールより)ととらえ、教師が活動をデザインし実施していくこととした。具体的には1日の活動を3つに分け、以下のように構成した。

<毎回の流れ>

最初の10分間：はなまるカフェ (Show & Tell)

=小グループで話す

90分程度：中心となる活動(表4)

準備活動(動機づけ) → 活動(→まとめ)

終了前10-15分：外国語講座

=参加者の母語を学び合う

表4 秋期の活動(教師主導)

第1回	自己紹介
第2回	今までの私・将来の私
第3回	レストラン(外国語疑似体験)
第4回	アルバイト困ったこと・解決法
第5回	したいこと・できること・紹介できることI
第6回	したいこと・できること・紹介できることII
第7回	災害について・地震
第8回	防災センター見学
第9回	子供の遊び・子供の頃
第10回	料理レシピ作り
第11回	料理
第12回	バファバファ
第13回	言いたいことがうまく伝えられない
第14回	病気
第15回	女と男
第16回	はがき絵
第17回	日本人と外国人のつきあい
第18回	活動グループ紹介、料理レシピ作り
第19回	料理
第20回	さよならパーティー

5.3. 参加者のコース終了後アンケート

秋期終了後の参加者アンケートには日本語の教授技術に関する記述がなかった。「私は初めの目的であった“ただの日本語教室ではなく、日本語を使うことで参加者それぞれが自分の文化を教え合えるような場にする”というものがしっかりと達成できたの

ではないかと思えます」「対人関係に悩んでいた私にとって、予想以上に気楽にできた」といった回答から、教師が設定した相互学習や自己開示という目標を参加者とある程度共有できていることがうかがえる。一方「初回、2・3回目まで集まりをもたせるためのアイデアを今一度考えましょう」という記述は、初回以降急激に参加者が減少したことを受け、コースの方向性をもう少しわかりやすく提示する必要を示唆している。また、「グループの会話ではむずかしすぎる様な気がしました（何人かの人にとっては…）」という回答もあり、外国人参加者の母語に十分対応できず、日本語だけで押し切ったために内容に深みのあるやり取りができなくて不満が残っている様子が表れている。

6. まとめ

教師らはコース終了後のアンケートを踏まえて、ミーティングを行い、コースデザインにおいて以下のような改善を図った。

- (1) ボランティア、学習者という呼称を使わずに、日本人も外国人も同じ「参加者」と呼ぶ。また両者に対して活動内容や参加費等の負担も等しくする。
- (2) 活動設計と教材作成は教師が担当する。
- (3) 活動は、自己表現活動、自分たちの生活や町を捉え直す活動、多様な参加者による共同作業で構成する。

この結果、コース終了後の参加者の期待は教師の目指す教育理念を反映したものになったが、一方で初日の活動以降、参加を見送った参加者は、教師のねらいに共感できなかった、あるいは参加に困難があったと考えられ、導入のあり方や多言語対応に課題を残した。

しかし、アンケートから教授技術に言及する記述がなくなったという事実は、ボランティア、学習者、教師といった役割意識が明確で個人の顔が見えにくい教室からの転換による結果と考えてよいだろう。教師がボランティア育成にのみ関わるシステムでは、教師が接触場面に関わることが少ない。役割を超えた個人の顔が見える教室づくりと、日本人住民・外国系住民の両者を対象とした相互学習を実現するためには、教師が外国人、日本人の両者に直接向き合い、両者を対象とした独自のコースデザインが必要

であると考える。

注

1. 広報での参加者募集には「ボランティア」という用語を用いることを行政から要請された。

参考文献

- ランパート, M. 秋田喜代美(訳) (1990) 「真正の学びを創造する- 数学がわかることと数学を教えること」 佐伯 胖・藤田英典・佐藤学(編) 『学びへの誘い』 東京大学出版会 189-234
- 西口光一 (1999) 「状況的学習論と新しい日本語教育の実践」 『日本語教育』 100, 7-18
- 野々口ちとせ (2002) 「地域の日本語教室における参加者の関係性- 日本語ボランティアと「学習者」と日本語教師-」 第11回小出記念日本語教育研究会予稿集 46-51
- 岡崎 眸・野々口ちとせ (2002) 「『共生言語としての日本語』の教育と地域の日本語教育」 『お茶の水女子大学人文科学紀要』 55, 131-143
- 岡崎 眸 (2004) 「『共生言語としての日本語』教育実習をどうデザインするか」 平成15年度科学研究費補助金研究 基盤 B-2 研究成果報告書 (実践編) 課題番号 14380117 162-177
- 岡崎 眸 (2001) 「多言語・多文化共生社会を切り開く日本語教育」 『多言語・多文化社会を切り開く日本語教員養成 日本語教育実習を振り返る』 お茶の水女子大学大学院 日本語教育コース 111-138
- 岡崎敏雄・岡崎 眸 (1997) 『日本語教育の実習- 理論と実践-』 アルク
- 佐伯 胖 (1995) 「文化的実践への参加としての学習」 佐伯 胖・藤田英典・佐藤学 (編) 『学びへの誘い』 東京大学出版会 1-48
- 庄司 恵雄 (2004) 『群馬県における外国籍住民の日本語学習の実態並びにボランティアによる日本語支援の状況』 平成15年度科学研究費補助金研究 基盤 C-2 研究成果報告書 課題番号 15520327
- 田中 望 (1996) 「地域社会における日本語教育」 鎌田 修・山内博之(編) 『日本語教育・異文化間コミュニケーション- 教室・ホームステイ・地域を結ぶもの-』 (財) 北海道国際交流センター 23-37
- 内海由美子・富谷 玲子 (1998) 「学習者観察の視点- 日本語ボランティア研修の内容と方法に関する評価」 『異文化間教育学会第19回大会発表抄録』 130-131
- 山田 泉 (2000) 「『地域日本語教育』の二つの在り方とその教授者のネットワーク」 『日本語教育における教授者の行動ネットワークに関する調査研究- 最終報告-』 日本語教育学会 176-189

ののぐち ちとせ/お茶の水女子大学 文教育学部
chitosenonoguchi@hotmail.com